

愛ってどんなものかしら

三上 鯛

ざわめくカフェの中、柔らかな日差しは、彼の目の前の空席を照らす。南西向きの窓は、午後二時過ぎの陽光を取り入れるのに絶好だった。

「ハア」

彼はコーヒーを啜りつつ、溜息を吐いた。午後二時に約束したことは、チャットで確認済みだ。

いかにも、彼女らしい。あと五分、連絡がなければ、催促の連絡でも入れようか。チャット画面を無意味にスワイプし続ける。

カランと音がした。奥に見えるドアが、開いた。緑の黒髪が陽光を受け、楽しそうに揺れている。彼女はこちらに一瞬目を止めた。

「あ、連れがいるので」

店員にそう言い、ゆったりとした歩みでこちらに向かってくる。鼠色のパンツに黒のシャツを着ている。女性らしくないその装いが、今まで実験していたことを示している。彼はホツと息を吐いた。

「待った？」

彼女の問いに、彼はためらいなく頷く。

「ごめん。手が離せなかったのよ」

「分かっている。実験とはそういうものだから」

水を持ってきた店員に、彼はレモンティーを頼んだ。彼女は少し微笑む。

「ありがとう」

「君はカフェインが苦手だから」

「覚えていたんだ」

彼はコーヒーを啜った。

「……二週間ぶりかな？」

唸るような彼の言葉に彼女は頷く。

「そうね。私もあなたも、卒論で随分忙しかったから」

彼は顔を手で覆った。

「止めてくれ。思い出したくない。それにまだ、発表が残ってる。考えたくもない」

「中間発表でかなり詰められたもんね」

彼女はフフ、と笑った。

「君もだろ」

「中間ではね。でも私は女の理系だから。そんなに質問されないでしょ」

彼は眉を寄せた。

「そういうの、嫌だって言った筈だけど」

「ふふ、貴方がいつもそう言ってくれるから、甘えているの。貴方のそういうところが好きだから」

彼は口端を下げた。

「どういうところ？」

「私より私を大切にしてくれるところ」

彼は眉を強く寄せた。

「君は君を大切にしなすぎだ。僕が君を二倍大切にしないと、この世の愛の総量のつり合いが取れないじゃないか」

「いつも言うけれど、この世の愛の総量は定量じゃないわ」

「いま、それは関係ないでしょ」

会計を終え、店から一人、客がいなくなつた。スーツを着たサラリーマン風の男だつた。

「でも私、貴方のそういう所、好き。例えば降り積もる雪みたいに、好きが重なっていくの」

「君は僕に好きというとき、比喻ばかり使う」

「だって、好きや愛してるなんて、何度も言ってるじゃない。私は貴方がそういう言葉たちに飽き飽きしてるんじゃないか、って配慮しているのよ」

彼はコーヒーを啜ろうとした。もう中身はなかつた。

「君は、お腹すいてない？」

「少し。あなたは？」

「僕も少し。 Pasta なんてどう？」

彼女は頷いた。メニューをさっと広げ、直ぐに彼に渡した。

「君は何かを決めるのが早いよね」

「自分の中に基準を作っておく。何が自分は好きかって明文化しておくことで悩むことが無くなる」

「君のそういう割り切つてるところ好きだよ。そうだね……竹が伸びるのを止められないみたいに、勝手に強制力が働いてしまう、みたいな」

「下手ね。決まつた？」

彼女は表情を変えず、選択を急かす。しかし彼は優柔不断であつた。彼女の後ろで、女性が二人、店から出て行つた。

しばらくメニューとにらみ合い、やっと決めたころには彼女は携帯を弄つていた。

「君のそういう所は苦手だ」

「あなたの優柔不断なところ、私も苦手よ」

彼は隣を通つた店員に声をかけた。クリーム Pasta とジェノベーゼ Pasta とコーヒーのお替りを頼んだ。

彼女は店員が去つたのを確認して、口を開いた。

「例えば、五億年ボタンを押すとして。私はあなたとなら何回だつて押す」

「なにそれ」

彼女は彼から目を逸らした。

「例えば、あなたとなら月だけじゃなくて、犬の糞も美しく見えてしまうかもしれないってこと」

「何？ 僕を試してるの？ 君みたいにそういう表

現力を磨いてないんだけど」

溜息を吐きつつ、彼は空いたカップを見つめた。

「例えば、僕は自分の中ですら意見が割れるんだけど、その内輪揉めは君の前だと収められる」

「何それ」

「君は僕の良いところを沢山知ってるってこと」

店員がコーヒーとレモンティーを持ってきた。コーヒーのお客様と聞かれ、彼は軽く手を挙げた。空のカップが持つていかれ、湯気の立つ二つのカップが置かれた。

「私の番ね。あなたが誰かに銃口を向けるとき、私は後ろからそれを支えてあげる。止めない、一人にしない」

「そこは止めてよ」

彼が笑うと、彼女はレモンティーを飲んだ。

「あなたの番よ」

伏し目の彼女の後ろで若いカップルが会計を終えた。

いつの間にか、満席だった店内は半分ほどの席が空いていた。

「……例えば君の肌の色と僕の肌の色は違って、それは蛍光灯の下か、日光の下か、暗闇の中でかで違って、それ全部が愛しいと思うよ」

「ふーん、いいじゃん」

彼女はそう言って、レモンティーを一口飲んだ。喉を鳴らす音が、小さく二人の間に落ちる。

「僕の勝ちかな？」

「面白くない冗談ね。あなたの好きの増加量と私の好きの増加量のどちらが大きいかって話よ」

彼女の言葉に彼は曖昧に笑った。視線をテーブルに落とす。木目の傷が見えた。

「それなら負けでもいいや。僕は君が好きだからね」

「そういわれると悔しいわ」

「試合に勝って勝負に負けたね」

「不毛な争いだったわ」

彼女はそう言って、肩をすくめた。

「でもね」

少し間を置いて、彼女は続ける。

「私があなただけを愛してるってのは本当」

鼻で笑って、彼は頷いた。

「愛ってね、相手を良くすることじゃないと思うの」

「じゃあ？」

「悪いままでも、良いと思えること」

彼は頷いた。反論しなかった。

店内には、もう数組しか残っていない。さっきまでのざわめきは、どこかへ溶けていた。

「……それなら」

彼は言った。

「僕は、君の隣にいるのに向いてるかもしれない」

「知ってるわ」

彼女はそう言って、最後の一口を飲み干した。

店員が二つの皿を持ってきた。クリームパスタのお客様、と言われ、彼は小さく手を挙げた。各々の前にパスタが置かれる。食欲をそそられる良い匂いが鼻の中に入った。

「……ねえ」

不意に、彼女が口を開いた。彼はカトラリーボックスに入れた手を止めた。

「愛って、どんなものだと思う？」

彼は一瞬だけ言葉に詰まった。問いの重さに、というより、あまりに唐突だったからだ。

「急だね」

「そうでもないわ。さつきから、私たちはずっとその周りをぐるぐるしてる」

彼はフォークを二本取り出した。そのうちの一本を彼女は手に取った。

「定義の話？」

「あなたはそうやっつてすぐ定義に逃げる」
彼女は責めるような口調ではなかった。事実を述べるみたいに、淡々としている。

「……じゃあ、感覚の話？」

「ええ」

しばらく沈黙が落ちた。厨房の方から、金属の触れ合う音がする。

レジのベルを誰かが鳴らした。中年の女性たちが会計を終えた。

「僕にとっては……」

彼は言葉を探すように、視線を宙に泳がせた。

「予測に対しての誤差かな」

「誤差？」

「君が次に何を言うか、どう動くか。分かった気になった瞬間に、必ず外れる。そのズレを、面倒だと思わずに追いかけること」

彼女は少しだけ目を細めた。

「それって、愛じゃなくて研究の話じゃない？」

「否定はしない」

彼は肩をすくめた。

「いいね。貴方の好きなどころ、また見つけた」

彼女は、窓の外に目を向けた。陽光はもう少し傾き、テーブルの影を伸ばしている。

「私は、愛はもつと雑なものだと思ってる」

「雑？」

「理由も、再現性もない。ただ、手を離したくないっていう衝動。説明できないまま残るもの」

彼は黙った。反論しようとして、やめた。

「君はいつも、説明できない側に立つ」

「あなたはいつも、説明できる側に連れて行こうとする」

パスタたちの湯気が立ち上り、二人の間に一瞬の幕を作る。

「ね」

彼女はフォークを持ったまま、言った。

「私たち、ちゃんと同じものを見てるのかしら」

「それはクオリア的な？」

彼女は答えなかった。代わりに、パスタを一口運ぶ。彼も同じようにパスタを食べた。

味は、思ったより濃かった。

彼女の背後、店内に残っていた最後の老人が、会計を済ませて出て行った。窓からの陽光は、すでに彼女の髪を照らすのを止めていた。